

ホネット承認論の現在と課題

— フェミニズムの観点から —

入 谷 秀 一

「私たちは知ることから始めることも、知ることですらできない。むしろ私たちは、形の定まっていない反応から意味を創造する行為へと至る動きに、我が身を預けるのだ。」(J・ベンジャミン)⁽¹⁾

1、はじめに——批判理論は男性主義的か

以下において私が行うのは、フランクフルト学派、または批判理論の名称で知られているドイツの知的潮流のうち、その第三世代の代表者として認知されている A・ホネットに焦点を当てつつ、この学派とフェミニズムとの、いわば幸福にして不幸な出会いを追跡し、またこれを批判的に考察することである。

この邂逅の歴史は、批判理論の第一世代にまで遡る。思想史的な背景を明瞭にしておくためにも、短く振り返っておきたい。

おそらくそこで最初に主導的な役割を担ったのは、のちにこの学派と袂を分かつことになる、精神分析家の E・フロムだった⁽²⁾。フロイト理論を学びながら、フロイトとやや異なり、エディプス期以前の母子関係を重視した彼は、今から見れば、のちのポスト・フロイト的なフェミニズム精神分析に近い方向を歩んでいた、とさえいえるかもしれない。ただし社会主義者でもあったフロムは、この母子関係を理想化し、ポスト資本主義の未来へと投影してしまった。バウハウゼンの母権論に魅了されていたフロムにとって、資本主義の行き詰まりが、これを生み出したプロテスタンティズム、すなわ

ち、エロスを敵視する、禁欲主義的な父権主義に起因することは明白だった⁽³⁾。他方で、第一世代のまとめ役だったM・ホルクハイマーや、のちにフロムに代わり学派内で頭角を現すTh・アドルノにとっては、資本主義の現状は、それ自体が父権主義の衰退と映った。マルクスの表現するなら、個性を失い、ありふれた労働力へと疎外された父親は、家庭内にあっても、もはや権威的な存在ではなかった。

アドルノがこの後歩むことになる道は、大変複雑だが、我々の議論の趣旨とはややズレるので、ごく簡単に素描する。というのは、今述べたような現状分析にもかかわらず、彼には、父親的な権威へのアンビヴァレントな態度が一貫して存在し続けたからだ。周知のように、ヨーロッパの合理主義がアウシュヴィッツにおける、人間の合理的な大量殺人という帰結を迎えつつあったさ中、彼とホルクハイマーは共著『啓蒙の弁証法』において、洗練された暴力に通ずるそうした知がヨーロッパにおいて生じた（engender）、その歴史的な由来を探ろうとした。そこで図らずも彼らが直面したのは、それが決して中立的なものではなく、徹底したジェンダー化（en-gender）の結果である、という洞察だった。女神セイレーンの誘惑の拒否にまで淵源するこの反-エロスの身振りを、彼らは知の男性的性格、と呼んだ。二人が「道具的理性」と命名した西洋知のパラダイムは、デカルトやベーコンの哲学が典型的に示しているように、精神を自然——そこには身体や動物だけでなく、女性というカテゴリーも含まれる——から遠ざけつつこれを対象化する、また対象化するだけでなく、まさにモノいわぬ資源としてそうした自然を合理的に搾取し尽くすという、堅忍不拔な支配欲に支えられていた。

だがこの洞察によって、彼がフロムのように、母権論的発想に傾くことはなかった。それどころかアドルノは、彼を含むユダヤ系の知識人の多くを母国から放逐することになるファシズムの起源を、あろうことか、社会のある種の女性化（非-男性化=同性愛化！）に求めたのである。労働環境が不安定なプロレタリアートは、まさにその不安を媒介として連帯感を強めた。ファシストはこの不安を利用し、人種という「家族」に収まるべきメンバー

とそうでない者たちとを腑分けした。潜在的なファシズムは、アドルノにとっては、容易に他者に同調する情動過多の女々しい性格に潜むものであった⁽⁴⁾。そして彼はその克服を、すでに時代遅れになりつつあったフロイト的な超自我——クールで禁欲的な父親像の典型——に求めざるを得なかった⁽⁵⁾。彼にとってファシストとは、要するに、男になりきれなかった男たちのことである。J・ベンジャミンをはじめ、多くのフェミニストが戸惑ったように⁽⁶⁾、カント哲学の男性的リゴリズムへの批判にもかかわらず、アドルノは、強く自立した自我というイマージに固執し続けた。

では、批判理論の第二世代の代表者J・ハーバーマスのケースはどうだったろうか。意識哲学から言語哲学へ、閉じた主体の決断主義から開かれたコミュニケーション行為による合意手続きへと、社会哲学の基盤のシフト・チェンジを図るハーバーマスにフェミニストが寄せる不満の一つは、公共性を重視するその身振りが、シフト・チェンジにもかかわらず（というよりも、チェンジによってむしろ一層）男性的に映るから、という点にある⁽⁷⁾。ハーバーマスにとって特定の他者との、あまりに緊密で情動的な結びつきは、自律的な市民として公共空間に参画する成人が背後に捨て去るべき、人間形成のいち段階に過ぎない⁽⁸⁾。母への依存は、やがて言語という、より普遍的な道具との結びつきに代わるし、言語を媒介にしたコミュニケーション行為において重要なのは、もっぱら、言葉のもつ認知的（cognitive）——情動的（affective）でない——機能の中立性だ、とされる。だが例えば mankind（人類）という語は、何と普遍的で、男性（man）的な含意を響かせていることだろう、というわけだ。ハーバーマスは、それぞれの社会的成員のプライベートな親密圏を、公共的な観点から、尊厳と法的保護の対象として重視し続けたではないか、と反論したところで、彼女らは納得しない。というのは、確かに、親密圏そのものがすでにして公的な——つまり、あくまで普遍性の観点から家事や育児の担い手とそうでない者とを不均等に価値配分した——空間である、といった問題意識は、彼には見出されないからである。フェミニストがよく口にするように、プライベートな領域とは、ある種の欠損状態

(privation)、つまり公共的で「ない」という否定的身振りのもとで境界づけられた領域に他ならない。

こうも言えるだろう、つまり、第一世代（アドルノ）はフェミニズムの受容を根底において拒否した。第二世代（ハーバーマス）は、フェミニズムを軽視した。そして第三世代（ホネット）といえ、その哲学的基盤の核心部分を、これと共有している。ホネットは、いわゆる承認論のトップランナーと目されているが、承認論の原型は、彼自身倦むことなく主張しているように、母と子の間の相互承認の経験にある。加えて彼は、ポスト近代的な社会においては、首尾一貫した自己のアイデンティティにこだわるような旧来の「男性的」なパーソナリティが評価される度合いは低くなるかもしれない、とも示唆している⁽⁹⁾。にもかかわらず、ホネットとフェミニズムの間には、今に至るまで、生産的な議論が生じているとはいいいがたい。そこには、ホネット本人が「フェミニストたちの研究は、わたしが設定した議論の枠組みをぶち壊しにしまっただけでなく、わたしの現在の知的水準からはるかに遠ざかってしまっている。」⁽¹⁰⁾と短絡的に方言して以来、かみ合わない議論や無視といった事態が目立つ⁽¹¹⁾。I・M・ヤングが述べているように「ホネットの承認論は、フェミニストの社会批判のための多くの知的資源を提供している……にもかかわらず、性愛とケアに関する彼の承認概念は、その目的に見合うに十分明示的とはいえないのである。」⁽¹²⁾

私は以下で、こうした状況の原因はホネットの理論的な「短絡」に求められるがゆえに、そこには修正の余地がある、と主張したい。と同時にこの修正が、承認論の様相を相当に変えるポテンシャルを秘めている、とも主張したい。

批判の核についてありていに言うなら、こうなるだろう。すなわち、ホネットは師匠のハーバーマス同様、あまりに軽々に「規範」に飛びつくのだ。その楽天主義は、確かに、まさに母子関係に悩まされ続けたフェミニストの神経を逆撫でするに足る。しかし人は、例えば太陽が東から出て西に沈む理屈を学習するがごとく、規範といったものに一足飛びに飛びつき、これを内

面化するわけではない。母は、常にいつも母「らしく」ふるまうわけではない。かといって彼女は、その母「らしさ」を全くの無価値と捉えているわけでもない。同様に、子供が大人らしくふるまうのは、(ハーバーマスが構想するように) 大人の価値規範を学ぶためだけではない。子供が、まさに子供としての自己の承認を求めて、大人を演ずる場合もある。ごちなく、不安げなその演技は、見守る大人たちに言外のものを読み取ってほしいという示唆であり、メタ行為的な訴えなのだ(これについては論考の後半で詳述する)。

こうしたダブル・バインド的な状況に慣れ親しみ、規範とつかず離れず戯れるといったプロセスを、ホネットはあまりに早く通過する。ここにも短絡がある。要するにプレイ、ドイツ語で言うところの *Spiel* (遊び/演技) という概念が含意する意味深さを、彼は過小評価しているように思えるのだが、他方で彼が承認論の第二の故郷と見なす精神分析家 D・ウィニコットの⁽¹³⁾ 場合、遊びはまさに、母と子だけでなく、分析家と患者との間を架橋する、極めて重要な概念であった。

ウィニコットのテキストほど、ホネットとフェミニズムの関係を考える上で重要な試金石はない。私は以下においてまず、ウィニコットの理論をホネットが自身の承認論にどう取り入れ、どう発展させたか、そのアウトラインを出来るだけコンパクトに記述する⁽²⁾。ここで重要になるのは、すでにご登場頂いているが、ウィニコットのないいわゆる対象関係論 (Object Relations Theory) を、男性 - 支配するもの / 女性 - 支配されるもの、といった伝統的なジェンダー対立の解体に役立てようとした J・ベンジャミンの存在である。実際、ホネットは承認論の本格的な試みである『承認をめぐる闘争』(1992 年)において、彼と 3 歳しか変わらず、フランクフルト大学で批判理論を学んだ経歴もあるこのフェミニストを「彼〔ウィニコット〕の著作をふまえて……精神分析学的手法を用いて愛情関係を一つの相互承認の過程と解釈する最初の試みをおこなった」⁽¹⁴⁾ と評価している⁽¹⁵⁾。そこで私は、二人のウィニコット解釈の共通点のみならず、その相違点にも注目し、そこか

ら、理論家としてのホネットに欠落している論点の析出を試みたい。それは前述したような遊びや演技の実践的な意義であり、またそうした戯れに伴う想像行為に他ならない (3)。

演技が持つ「かのように」の性格は、あまり真面目になるな、遊びが上演する規範的身振りを額面通り受け止めるな、と説く。過剰に規範的な母親は、その生真面目さゆえに、まさに幻想を現実と同一視するよう、子供に迫るだろう (「あなたは、女の子らしい女の子でいさえすれば幸せなのよ!」)。しかし、ウィニコットのいう、ほどよい母 (good-enough-mother) とは、そうした規範の限界をわきまえ、その重みを正面から、だが軽く受け止めることのできる母である。同様に、生真面目な親をまねてからかう子供の演技は、政治風刺にも通ずる社会批判的な潜勢力を秘めている。

外側から規範を当てはめるだけでは、人は「動かされる」ことはない。私が見るところ、規範をいわば、やわらかく受け入れるこうした内在的プロセスこそが、ホネットにも、またたいていの「真面目な」フェミニストにも欠けている^{ダイナミクス}力学なのだが、今に至るまでのベンジャミンの仕事は確かに、遊びの実践が持つ道徳的な「力」に、彼女が注目し続けてきたことを物語っているのである (4) (5)。

2、ホネット承認論の展開——母子関係をめぐる精神分析的議論から

人は、様々な「他者」との関係を構築する過程で、自分がしたいこと (欲望) を発見し、なせること (能力) を磨き、なすべきこと (規範) を内面化してゆく。欲望は特定の他者との情緒的で、セクシャルでもある結びつきを志向し、能力や技能を同じくする者同士では、価値観の共有がなされる。そして規範は、もしそれが普遍妥当性を主張するのであれば、最終的には、すべての関係者を同等の法的人格と捉える、より開かれた立場をもたらす。

これら三つの関係性の領域のうち最初のものを、ヘーゲルは「家族」と呼んだ。ホネットは『承認をめぐる闘争』において、(精神分析家を含む) 様々

な心理学者の臨床的知見に基づき、ヘーゲルがやや思弁的に論じていたこの理念の実証的な肉付けを試みる。その再彼にとって重要だったのは、フロイトにより定着した幼児発達モデルの修正である。というのは、一方に快樂原則（幼児）があり、他方に現実原則（大人）があり、母親をこの対立する二つの間の緩衝材に位置づけるフロイト的世界観は、あまりに生物学的なりビドー・モデルに依拠している、と思われたからである。対して、ホネットがここで全幅の信頼を寄せるウィニコットの場合⁽¹⁶⁾、母とはリビドーと全能感にまみれた、いわゆる原初的ナルシズムを下支えする存在だ、というフロイトの主張とは違い、初期の母子関係においても——或いはそこでこそ一層——快樂原則と現実原則とが同時に立ち現れる、とされる。

全てを満たしてくれる母との共生を一切疑わない段階は、逆説的ではあるが、母の一時的な不在をそれとして捉えるような認知機能の発達に伴い、早々に崩れることになる。そこでは赤ん坊は、母が自分以外のものに気を取られていることに気がつくにつれて、攻撃的な行動をとり始める。ウィニコットが破壊とよぶこの行動はだが、欲求が満たされないことへの不満というリビドー経済的な解釈では汲みつくせない意義を有している。攻撃はここでは、母が自分とは違う独立した存在である、という手ごたえを得るための検証的な試みだ、とウィニコットは考えるのだが、これまた逆説的なことに、彼によれば、そのような独立した他者に見守られている、という信頼を得て初めて、幼児は自分の存在を、全能感がもたらす単なる幻想以上のものとして確証できる。ただしそのためには、母は幼児の破壊の試みを堪え、検証のプロセスを「生き残る (survive)」必要がある。彼女が我が子の怒りや不安をまとめて包み込み、その上で根本的に棄損することなく存在し続けることで、子供は、容易に破壊されえない世界への信頼を得る、というわけだ⁽¹⁷⁾。

この信頼は、ウィニコットを読むホネットによれば、幼児が一人でいる能力を育てる。というのは、不安なく自身の世界に沈潜することは、適度な距離から見守られている、という感覚がいわば自明化するほど揺るぎないものであることを前提とするからである。対して——ホネットはあまり言及しな

いが、クライン派でもあるウィニコットによれば——母が容易に幼児の攻撃に屈したり、また度を越した仕返しをしたりする場合、幼児の世界は、自分が母を「死なせてしまった」ことからくる罪悪感、もしくは復讐の幻想によって満たされてしまう。常に母の機嫌を伺いながら生きる子供は、攻撃的な幻想を我が身に向け続けるしかない（「私は悪い子で、何かにつけ、おしおきをされて当然なんだ」）。かくして彼（女）は、自分の想像の外にある現実に触れることができなくなる。

ウィニコットによれば、自身の外に世界がある、という確信を得られて初めて、幼児はそうした世界への攻撃的な想像を、まさに想像として自由に駆使できる。「外」があるからこそ、その外に寄り添いつつ、それと完全に融合することのない「内」（子供の想像＝創造領域）が生まれる。これは或る意味、二元論的世界観とも形容できようが、ともあれホネットは、いわば破壊によって構築されたこうした複雑な世界構造には、あまり立ち入らない。彼がウィニコットの洞察で特に強調するのは、母との共生、そしてそこからの分離を繰り返し試みる中で、人が自他関係のバランスをいかに習得するかという点である。分離の傷があまり大きい場合、人はその——おそらくトラウマ的でもある——不安の埋め合わせとして、全能感が支配する自身の内に引きこもるか、外（母）にベッタリ依存するようになってしまいが、内と外とがアンバランスな関係にあるという意味では、これは構造的には同じ事態を指す。ただしウィニコットによれば——ホネットも注意を促しているが——実際には幼児がアクションを向ける対象は、ひとり母親ばかりではない。愛着ある人形をもてあそび、或いは、日ごろの不満をお気に入りのクッションにぶつけるなどして、人は身の回りの様々な対象との「攻撃的」なつきあいから、想像と現実との適度な境界線を引き直す機会を、繰り返し得る。周知のように、ウィニコットはその都度選ばれる、こうした遊戯的実践のパートナーを「移行対象（transitional object）」と名付けた。

ウィニコット（ホネット）によれば、移行対象との戯れは、要するにアニミズム的な「モノ」との——ただしそれは、大人になってしまった観察者の

立場から見れば、人が生きる上で不可欠の、だが結局は現実を一時的に棚上げするだけの、非合理的な——交流として特徴づけられる。他方で、当事者的な視点に立つなら、一時的であっても我を忘れるほど夢中になった戯れの経験は、芸術や宗教を生み出す源泉となる。すなわち、そこには集団的熱狂という現象には欠かせない、他者との融合ないし相互承認の痕跡が沈殿しているのだ。さらにホネットは、ウィニコットの診断を踏まえてこうも主張する。つまり、クールな現実を一時的に括弧に括り、そうした安心と慰めの「合理的に許容された形而上学の領域」⁽¹⁸⁾に身を退くことは、「「健康な」退行現象」⁽¹⁹⁾でさえある、と。「愛する人間の死という最大の困難に直面して私たちは、その人物がまだ私たちのあいだにいたらという可能性と現実の中で遊ぶことを相互に許すのだ。……これは存在論的な中間領域であり、別に疑問に付されたりはしないものだ。ここでは認知的退行が、生を啓蒙的に克服するためにおこなわれている。」⁽²⁰⁾

移行対象が想像と現実を架橋するように、ここでは遊びが、非合理的かつ合理的な特徴づけのもとで語られている。このアンビヴァレンツもまた、ホネットの議論では、繰り返し登場する。

遊び自体が、ある種の移行的な契機を担っている。問題を別の角度から照射してみよう。例えばハーバーマスは遊びに触れることは多くないが、それでも意外と重要や役割が付されている⁽²¹⁾。彼は遊びを視点の複合化、或いは視点自体の普遍化を可能にする行為実践と捉える。具体的に言うなら、即興的なごっこ遊びの中で互いに警察官の役を演ずることは、その役を担う他者（「あなた」という二人称的な行為者の視点）の立場を想像するだけでなく、役を担う自分の立場（「私」という一人称的な行為者の視点）を「私」自身が反省的に捉える、という機会を与える。さらに進んで、遊びが「私」と「あなた」の間の任意な取り決めでなく、集団で行う野球のようなゲームへと移行した場合、全てのポジションを全てのメンバーが担いいうるという原則がゆえに、参加者は全員が一定のルールに従うよう義務づけられる。この時「私」は、一つのポジションを全うする行為者としてのみならず、ゲーム

自体の推移を一步引いた中立的な観察者目線で捉える、という機会に幾度となく晒される。ゲームに勝つという戦略的ふるまいに徹するにせよ、或いはその場合にこそ一層、ゲームの参加者は、互いに対等の立場にある成熟した個人としてメンバー同士を捉えるよう促される。相手は、自分の想像を好き勝手に投影しうる鏡ではない。というのはゲームの場合、「私」が考える戦略は「あなた」も考えうるはずだ、という可能性を常に斟酌する必要があるからだ。ゲームには、従ってハーバーマスが考えるに、普遍的な集団意志のひな型がある。そこに参加するということは、ゲーム全体からして「私」に何ができるか、何をすべきかという、観察者の視点から見えてくる集団の期待に照らして、自らの行為を調整することでもある。要するにそこには、早くも、対称的な自我関係というコミュニケーションの理想的在りようが読み込まれている。ゲームはハーバーマスにとって、規範という「一般化された他者」(G・H・ミード)のまなざしを人が積極的に取り入れるのはなぜか、という問いへの、非常に説得力ある解答を与える好例なのだ。

興味深いのは、ホネットの場合も、ハーバーマスとは違う仕方で、遊びを理想化する傾向がみられる点である。遊びは、分離という痛みを経験する以前における、他者(母、或いはその役を担う準拠人格やモノ)との共生を物語る。ホネットによれば、こういう状態は他に代えがたい濃密な印象を残すが、決して長続きするものでもないで、人は誰しも、その時々²²⁾の愛着あるパートナーと一体化していたという経験を、ある種のエピソード記憶のように持つことになる⁽²²⁾。ただし彼は、精神分析における事後性の問題をあまり重視しているようには見えないので、そうした記憶がもとから蓄えられていたものか、或いは、分離の痛みへの穴埋めとして、過剰に理想化されたコンテクストが後から象徴的に構築される、と見なすべきなのか、はっきりしない。

ホネット自身、ある所で「愛する対象との融合というエピソード的状态を構造的見地から相互行為と呼ぶことができるのは、観察者の視点からのみであり、嬰兒(ないしは関係する人格)の視点からはそうはいえない。反対に、

当事者の視点をとるならば、融合状態を間主体性の一形態とはいえない。なぜなら、そういえるための前提である、二人の自立的主体の向かいあう関係が十分に体験されないからだ。」⁽²³⁾と告白している。アドルノならこう言うだろうが、他者との戯れを慰めと捉えるとき、すでにそれらは、毒気を抜かれ、性愛につきものの恐れと快楽という両義性を失っている。別言するなら、冷たい現実を忘れさせてくれる合理的手段と考えられるほど、我々は経験の非合理性から解放され、距離を保つことが出来ている。そうしたエピソードからは、否応なしに回帰するようなトラウマの要素は消えているが、そうであるのは、ホネット自身断言するように、融合の経験が、その正常なる基準を知りうる（とみなされる）観察者の立場からの「ある意味で方法論的抽象の結果である」⁽²⁴⁾に過ぎないからだ。

彼は融合が、すでにそれが人生のいちエピソードに過ぎなくなった成人のまなざしからの再構成、というフィクショナルな性格を有することを否定しない。が、他方で彼は、大人になってもスポーツ観戦や仕事場での共同作業などで——何とも陳腐な事例だと思わなくもないが——繰り返される融合の経験が「そのもとで主体が相互に承認し合うことができる光を与える尊敬規範や価値をお互いに分け合っているという共通の感情を育む」⁽²⁵⁾と明言する。注目すべきことに、融合はここでは現実には代わる慰謝ではなく、現実を主導する役回りを与えられている。しかしホネットがここで念頭に置いているような、規範や共通の価値を含む対称的な関係は、彼自身が『承認をめぐる闘争』でヘーゲルに依拠しながら整理していたように、基本的には、（法と連帯という）性愛的でない承認形式に基づくもの、とされていたことに留意したい。ジェームス・マーテルはこうも指摘している。「ホネットにとっては、子の母に対する関係と、より大きな政治的共同体に対する市民との関係とは、全く相等しい。（中略）目的論に対する抵抗にもかかわらず、彼は権利や普遍的なものを考える場合の方法でもって、これを再び〔自身のウィニコット論に〕持ち込んでいるのである。」⁽²⁶⁾要するに、理想化された自他関係を早期の母子関係に投影するという論点先取が起きている、というわけ

だ⁽²⁷⁾。

3、負の感情とダンスする——J・ベンジャミンの承認論

ホネットが繰り返しフロイト式のリビドー・モデルの老朽化を指摘する際、ポイントだったのは次の二点である。第一にフロイトは、いわゆる口唇期にせよ肛門期にせよ、幼児の生を、物質代謝（すなわち、欲動とその充足）という唯物論的な切り口に従って解釈し過ぎる。第二にそうしたモデルは、いわばアトム化された個体内だけで関係が成立しており、父母がそこに介在するにせよ、母はリビドーを充足させる触媒として、また父は、リビドーの流れを介して固着する傾向にある母子関係を切り崩し、子の母離れを促す第三者としてのみ、位置づけられる。だがポスト・フロイト的な心の科学が提唱したのは、リビドー自体を否定することではなく、それがいかに、他者との関係性において組織化され、いわば発端からしてすでに社会的な様相を帯びているか、ということだった。と同時にそこで注目されたのは、欲動充足を巡る父・母・子の闘争的な駆け引き（エディプス的状况）ではなく、むしろ闘争によって発見される他者の存在、或いは、そうした他者の承認という、いわば道徳的感性の源泉だった（ヘーゲ尔的洞察）。幼児は、すでに早い時期から、他者が自己の意のままになる存在ではないこと、また最初期の全能感の放棄がなければ、自分もまた自由な主体として承認されないことを、ほかならぬ自分自身の、かけがえのない生でもって学ぶ。彼（女）は傷つき、不安と恐れに苛まれるが、状況に恵まれたならば、傷つき過ぎることなく（そして他者も傷つけ過ぎることなく）、様々な愛着対象に助けられつつ「生き延びる」。故にホネットがそうした対象との早期の関係性の中に、普遍化可能な道徳規範のポテンツを認めることには、それなりの学問的裏付けがある。実際、相手を生かすとともに自分も生き延びた、という経験が僅かなりとも我々のライフヒストリーに沈殿していなければ、我々には、他者の生のかけがえのなさや特殊性、或いは様々な相手との「差異」に敬意を払うため

の強い促しが生起することもないのではないか。一般論としてテーゼ化可能で「も」ある道徳が心身の琴線に触れるのは、まさに我々がそれらを単なる一般論としてでなく、どこかで身に覚えのある、いわば古傷として、つまりカント的に言うなら、我意を放棄するよう指令する義務的なものを各人がそれぞれの流儀でもって発見した、そうした出来事として受け止めているからではないか⁽²⁸⁾。

しかし他方で我々が、生まれながらにして物分かりのよい道徳的主体でないことも、そしてまた、他者との関係性の構築に常に首尾よく成功するわけでもない、ということも確かだろう。まさしく欲にまみれたセクシャルな存在でもある我々は、それほど手早く、他者を征服することをあきらめるのだろうか。そんなことは可能なのだろうか。ホネットは、ヘーゲル同様、欲動から承認への道を、或いは、リビドーからダイアローグへの道を急ぎ過ぎるように思われる。A・アレンとB・オコナーは「ハーバーマスの批判理論の基礎を侵食することなく」承認論の新機軸を開拓した、とホネットの業績を紹介しているが⁽²⁹⁾、案外ここには、批判的なニュアンスが含意されているのかもしれない。

私の見る所、ここにも二つの問題がある。第一に、ウィニコットに従うならば、「私」の外の世界に「私」が他者を発見し、その独立性を認めた後でも、「私」は他者への攻撃を止めないのである。破壊のプロセスは、むしろ人の内的生活にとって不可欠である、と彼は公言して憚らない（この洞察の延長線上に、ホネットの承認論は理想主義的で、要するになおハーバーマスのだと執拗に反論するJ・ホホワイトブックの主張がある⁽³⁰⁾）。ウィニコットによれば、この攻撃は幻想や想像という形で展開される。とはいえ、確かに彼がここで破壊や攻撃という概念でもって具体的に何を主張しているのかは、決して明瞭ではない。しかし私は、性的想像や遊びという形で人が日々享受しているそうした「破壊の象徴化プロセス」⁽³¹⁾にもっと目を向けるべきだ、と考えるベンジャミンの主張には、見逃せないものを感じる。

第二の問題は、他者との関係がうまくいかない原因について、ホネットが

あくまで「子」の側からしか論じていない点である⁽³²⁾。彼に従えば、他者への不寛容にせよ、自分自身への不寛容にせよ、自他関係のバランスが崩れるのは、愛着対象との離反がソフトランディングできず——これは、いかにも典型的にフロイト的で男性的なストーリーではないか！——、見捨てられるという不安を首尾よく処理できなかった主体の問題である。だが、事態はそんなに単純ではないのではないか。母から離反するのが難しいのは、まさにそれをケアラーである母が子に許さない、というケースも少なくないのではないか。無論、ここには同時に、そうしたステレオタイプなイメージを母に期待する文化的・社会的エートスの問題もある。まさにそれは数多くのフェミニストが、男女差別を再生産し続ける、可視化されにくい権力構造として告発してきた通りだ。従って「私は母を見捨てようとした悪い子だ。だから私はもう二度と、母から目を離してはいけないのだ」、といったストーリーを内面化する娘がいたとして、それは娘だけの、或いは母だけの問題ではない。が、いずれにせよホネットは、暴力性を帯びるそうした社会構造的な次元については、ほとんど触れていない。あたかも彼にとっては、人は好きなきときに一人になれ、好きな時に他者とのよき共生の余韻に引きこまれるようである⁽³³⁾。

ベンジャミンは初期の母子関係を、共生（symbiosis）⁽³⁴⁾ではなく、相互に共鳴的な運動性を帯びた遊び、という側面から記述する⁽³⁵⁾。それは「本能的満足や分離とは正反対の相互性」⁽³⁶⁾である。例えば、表情や語りかけを通して互いの反応を伺い、レスポンスを返したり模倣し合ったりすることで同一のリズムや共同的な演技が生起するが、こうした遊びの「ノリ」は決して長続きするものではない。一方が他方をもっと自分のリズムや領域に引き込もうとして、演技に強引な様相が目立ってくることもあれば、反対に、反復に飽きた他方が新規な遊びを欲したり、遊び自体から身を引く一人の世界に没入したりすることで、まさしくパートナーに気乗りしなくなる、ということもある。ベンジャミンはこうした近づきと遠ざかり、共鳴と不協和音の交錯という現象に——かつて彼女が批判したアドルノの音楽論を彷彿とさ

せる筆致でもって——注目するが、そこには「大人のエロティックな戯れの原型」⁽³⁷⁾がある、ともいう。

ウィニコットの「生存」についても、彼女は親の側の問題を決して省略しない。世界の手ごたえを求めて最も身近な対象を傷つけようとする子に一番していけないことは、報復である。破壊に対し破壊でもって応ずるならば、子はこの破壊の反復自体をリズム化してしまう。別言するなら、破壊のイメージは、親による子への懲罰という実際の破壊行為と融合してしまう（二元論的世界の崩壊）。他方で、ベンジャミンによれば、破壊のイメージを楽しむことは、それが決して現実と一致しないということ、すなわち、破壊されえない外部（母）への信頼に基づいてのみ、可能となる。対して、マゾヒストにとっては自己破壊のイメージそのものが唯一の現実であるがゆえに、彼（女）は攻撃を文字通りに受け取るしかない。完全に相手に屈服する自己をイメージし、その通りに行動すること、これがマゾヒストにとって唯一、世界の手ごたえを享受する手段となる。だがベンジャミンは、こうも述べる。「破壊について考えると、私たちは、エロティック・ライフには必然的に攻撃要素が付随することを想起せざるを得ない。支配の空想と関わったエロティックなつながりとほんものの支配とを分けるのは、存続、つまり他者が作り出す差異なのである。」⁽³⁸⁾ 他者（外）への信頼と、そうした他者への攻撃的な空想は両立する。だが遊びはいかにして、攻撃の文字通りの深刻さから自らを差異化し、まさしく単なる遊びとなるのか。

ベンジャミンが近年行っている考察は⁽³⁹⁾、遊戯の持つメタレベルの働きに光を当てるもので、そこではウィニコットだけでなく、G・ペイトソンやP・フォナギー、M・タルジェなどの精神医学的な知見を用いる一方で、精神分析家としての自らの臨床経験に基づき、そうした知見を具体的に実証してみせている。ここでは、その一端だけでもパラフレーズできればと思う。

相手のメッセージを言葉通りに受け止めてはいけない。メッセージは「内容」として言外のものを隠喩（メタファー）的に含んでいるだけでなく、その受け止め方（「形式」）にしても、違う調子であってほしい、と密かに望ん

でいる。ただしこれは単純に、メッセージが暗に示している訴えが、発せられた内容と真逆のものだ、ということではないので、扱いには注意を要する。「あなたに私は助けられない」という患者の言葉を、そのまま「あなたに助けてほしい」という意味に反転させるだけでは⁽⁴⁰⁾、別言するなら、患者の強がりに、ただ単に傷ついた被害者の脆弱さを読むだけでは、十分とは言えない。重要なのは、分析家（ダイアログのパートナー）に対し攻撃的にならざるを得ない、患者の真剣さを否定することなく、だが同時に、その矛盾を患者とともに、別の方向、別のリズムへとずらしてゆくことだ、とベンジャミンは述べる。

文化人類学者として出発したベイトソンは、一見攻撃的に見える動物のふるまいの多くが型通りのもの、儀礼めいた擬態であることに着目した。それは「囁んじやいないよ、くわえてるだけだよ（This nip is not a bite.）」というテーゼに集約しうるが、ここには多くのメッセージが含まれている。すなわち、無駄な争いを避けたいという深慮、注目されたいという願望、攻撃を深刻に受け止めるなよ、というからかい、等々。無論、時としてそうしたメタ・メッセージは無視され、擬態は現実と一致する。威嚇が文字通り、相手の生存を否定する攻撃のはじまりと受け取られるケース、或いは——これはベンジャミンも指摘しているが——軽口やおふざけ、冗談がかえって相手を深く傷つけてしまうケースなどがそれだ。嘲笑と化した笑いは、その場の様相を一転させる。遊びは、まさにそのあからさまな軽薄さ（「マジになるなよ」）によって深刻な攻撃性を発揮する。しかし、むき出しの敵意（相手の否定）へと短絡する戯れは、もはや遊びではない。逆にいうなら、遊びにおけるメタ・メッセージをどう特徴づけるか、ということが、攻撃的な想像について考察する上で、重要なヒントを与えるだろう。

人はいかにして、遊びの才能——しつこいが、それはメタ・コミュニケーションの才能でもある——を開花させるか。やはりというべきか、その鍵も母子関係に求められる。フォナギーとタルジェの洞察を借りつつベンジャミンが説明する所では、母は幼子の様々な不安を、自らの大げさな身振りや表

情でもって受け止めるが、ここには、あなたの不安は分かるが、それは深刻なものではない（あるいは、私は不安の原因を否定しないが、同時に、それへの備えがあることも知ってほしい）、というメッセージが含まれている。母は子の情動を微妙にスライドさせながら映し返す、いわば偏向を含んだ鏡の働きをする、というわけだ。或いは、幼児が好むごっこ遊びなども、現実をそのまま映し出す代用品ではなく、様々な違った角度から、或いは多様な距離感でもって現実の意味にアプローチするメタ行為と見なすこともできよう。

ベンジャミンが紹介するハンナのケースで具体的に見よう。絶望に打ちひしがれることが多く、娘を顧みなかった母を鏡のようにして育ったハンナもまた、自己肯定感が希薄で、常に自分を責めているような女性だ。人間関係を円滑に築けない彼女は、ふがいない自分を自虐的にアピールし周囲にからかわれる、というネガティブな手段によってしか、承認欲求を充たすことができない。しかしベンジャミンは、マゾヒスティックな彼女の所作が、同一化している母への攻撃——それは、底なしの不安に満たされた母の予感から身を守るためでもある——によっていわば二重写しになっていると捉え、またそうした攻撃に含まれる怒りや厳しさそれ自体は、すぐさま否定すべきものではない、とも考える。

「ハンナが見た夢によれば、彼女の家族はピクニックに出かけていて、そこにアドルフ・ヒトラーが参加してきた。夢の中では、と彼女はユーモラスに報告したのだが、つまるところヒトラーはそんなに悪いやつには見えなかったわ。そう自分に言い聞かせたの、と。私は「ヒトラー」を招待した彼女の大胆さを評価し、また彼女は、邪悪な行為者と自身を同一視していることにおどけた様子を見せながら、家族に対して抱えている憎しみを認めたのだった。このセッションの最後に、マダム・ボヴァリーに関するフローベールのコメントをパラフレーズしながら、彼女はこうしゃれてみせた。「ヒトラーは私だ。」⁽⁴¹⁾——このやり取りは意味深である。ヒトラーを軽く扱うハンナには、母を、そして自分を消してしまいたいというトラウマ的願望か

らの解放の兆候が伺えるのだろうか。或いはこのユーモアは、依然として、自虐的なおどけ、というハンナの昔からの習慣の再演に過ぎないのか。だがベンジャミンは、何とか自分の中の負の感情と向き合おうとするハンナを評価する。それは、ノーマルな人間であれば不要なものとしてすぐさま廃棄されるべきものではない。人生がうまくいかないことへの怒りは、感情としては、何ら不当なものを含んではいない、と彼女は断じる。

ベンジャミンの分析によれば、ハンナは当初、彼女に対し、何でも知っている専門家であるが無力な傍観者、という立ち位置を要求していたようだ。これは、感情的な欠陥を知的詐術（ダメな自分を演じるという）で補ってきた、もの分かりのよすぎる自分自身を投影したもので、分析家が何もできればそれだけ、患者であるハンナの自己イメージが揺らぐことなく、差し当たりの安心が得られる、という構図になっていた。しかし、ハンナに半ば波長を合わせていたベンジャミンには、ハンナが抱く怒りとはとは違う志向の憤りが生起してくる。知らず知らずのうちに、彼女は我が子を見るように、ハンナを見る。母を演ずるよう促されるベンジャミンは思う。どうしてこの子が責められねばならなのか。「そう、私は全く滑稽なことをしていたわ。不安な時に、その傷つきやすさを使っておどけたことをやってた、というわけね。そう述べたアンナに私はいった。そう！それは全くこっけいだわ。あなたはそうやって自らを罰し、またその自虐に人々が加わるよう招き入れた。あなたが責任を持つ（responsible）べきだったのは、あなたの傷つきやすさに、ではない——傷つきやすいのは人として当然よ——、そうではなく、自分を罰し、打ちのめすことに対してだわ。つまり、自分への共感が欠けていることにこそ、あなたは応じる（responsible）べきだったのよ。」⁽⁴²⁾ ハンナの厳しさが、空虚な強がりにも、費やされてきたことにベンジャミンは憤る。だが、この憤りにもしハンナが共鳴することが出来れば、彼女もまた、厳しさを、傷ついた自分と十分に差向かうだけの粘り強さに変換できるかもしれない。脆弱さを無視することも、またそれに浸りきることもなく、絶望のその先を見据えて、まるで我が子の未来を指し示す母のように自分を想像

し、鼓舞し続けるような、そうしたイマジナリーな領域（D・コーネル）が開拓できるかもしれない。

4、闘争なき「承認をめぐる闘争」

「才能というのは、ひょっとすると憤怒の首尾よく昇華された姿に外ならないかもしれない。言い換えるなら、手に負えない対象物を破壊する目的のために無際限に増大していたエネルギーを、精神を集中した辛抱強い省察に振り向ける能力、ちょうど幼少のむかし金切声を出すまで玩具を痛めつけなければ気がすまなかったように、しつこく対象の秘密に食いついて離れぬ能力の別名であるかもしれない。……もっと言えば、囚われの状態から自由になり、囚われていることへの憤怒から脱却するためにも、こうした憤怒が必要なのではあるまいか？ 宥和的な要素にしても、破壊的要素の抵抗を経て始めて獲ち取られるものではあるまいか？」⁽⁴³⁾

ベンジャミンがハンナと繰り広げる殺陣（stage combat）は、相当入り組んでいる⁽⁴⁴⁾。ここでの治療者と患者のダイアログには、母と子の——ついに展開されなかった、だが展開されたであろう、或いは展開されるべきだった——フィクショナルなダイアログ以上のものがある。語りを通じて、二人は互いの中に、見ることを避けていた自身の姿を発見する。攻撃性を帯びる訴えかけが、そうした暴露を、そして暴露を通じたアイデンティティの揺さぶりを可能にするのだ。その意味でもダイアログは、単なる合意や共通了解への練り上げを志向するのではない。些細な語りであっても、その背後には入り組んだメタ・メッセージが幾重にも交錯しており、患者だけでなく治療者もまた、そうしたコンフリクトに身を晒し続ける、という試練を避けられない。ハンナは当初、理想的で、厳しく自分を律する母親像をベンジャミンに投影していたが、それは、この投影を通じて、母を、そしてその母と同化している自分を責めるためでもあった。と同時にこれをベンジャミンが息苦しく思っているのは、確かにハンナの攻撃に、弱みをみせたくない

いう分析家としての不安、或いは人の母としての防衛的構えが存在することを、無意識のうちに感知していたからである（と、事後的に彼女は自己分析している）。

攻撃はこうしたケースでは、自分に対する羞恥心に駆られて起動するにせよ、或いは、相手を恥ずかしめようとする意図で成されるにせよ、両義的な側面を持つ（攻撃は同時に防衛であり、相手のごまかしを暴露すると同時に、自分をごまかすものである、等々）。怒りは、もろくも保たれている自己のアイデンティティのまさにその古傷に他者が（あるいは自分自身が）触れることで生まれる。しかしダイアログという、包含と承認、そして生存が曲がりなりにも約束されている場面においては、そうした傷への接触は、真実へのアプローチのためには欠かせない。ここでは攻撃は、相手＝自分自身を屈服させる手段ではない。むしろ怒りは、相手＝自分自身との間に欠けていた情動的な水路を、半ば強引に引き出す役割を果たす。そこにダイアログの様相を、或いはその調子を一変させるポテンツがある。反抗的な娘に対し何もできない母の弱さへの怒りを（ベンジャミンを媒介にして）表明していたハンナは、突如として、誰もなぐさめることが出来なかった哀れな母への同情を爆発させる。自虐的な母を演じるポジションに置かれたベンジャミンを前に、ハンナは言う。「あなた〔ベンジャミン〕は彼女を愛していないし、誰も彼女を愛せなかった。彼女はそれほどまでにかわいそうな人なのよ！」⁽⁴⁵⁾——ハンナのこの言葉が文字通り、ベンジャミンを揺さぶるのは、その批判的な口調に、まさに母（と同一化しているベンジャミン）をかばうトーンが同時に感じられるからだ。

怒りは愛の訴えでもある、という月並みな言葉の意味が、改めてリアルに伝わってくる。ベンジャミンとハンナが共有する怒り、それは一言でいうなら、承認と庇護の枠外に置かれたという不当な境遇、すなわち、ホネットのいう「軽視＝存在の否定（Miss-achtung）」に対する負の感情である⁽⁴⁶⁾。だがこうした感情は、我々の日常に満ち満ちてもある。何気ない子供の遊戯からして、そうした感情のどうしようもない蠢きとの付き合い、という側面を

持つ。ただしここでは、負の感情は一本調子で現れるのでもないし (“This nip is not a bite.”)、怒りは特定の相手にのみ、向かうのでもない。ぬいぐるみを使って母、自分、弟の三役を演じる娘には、母への甘えと同時に、例えば身体に障害をかかえた弟にばかり世話をやく母への——そして母の愛を独占する弟への——いらだちを何とか自分で受け入れたい（と同時に、これを母に理解してほしい）、という思いがあるのではないか⁽⁴⁷⁾。もし幸いに娘が理解者に恵まれるのであれば、弟への嫉妬心が消えることがなくとも、そうした感情は、弟を世話する母のポジションを隠喩的に演じることで（そしてそれを見守る大人の存在を感じることで）、柔らかに受け止められるだろう。

かくの如く、「かのように」の演技は、ただ単に相手の立場に感情移入する手段ではない。そこでは、関係性そのものの複雑さに耐える（＝屈服し、自己の主体性を放棄しない）、という修練が行われている。そうした危険な遊びを生き延びたならば、攻撃者はいつまでも攻撃者のままで、被害者はいつまでも被害者のまま、という排他的なシナリオに陥ることなく⁽⁴⁸⁾、一定身を引いた所から何度も苦しい状態にアプローチし、想像豊かにこれを解きほぐすポジションを確保できるかもしれない。少なくともベンジャミンは、ウィニコットのいう「患者を遊べない状態から遊べる状態へ導く」⁽⁴⁹⁾という指導を、このように理解している⁽⁵⁰⁾。

興味深いことに、これまで追跡してきたベンジャミンの思想的足跡は、多くの点でホネットのそれと交錯している。彼女同様、ホネットもまた、母と子との間で交わされる微笑みを最初の相互承認の経験と捉えており⁽⁵¹⁾、なおかつこれを単なる心情の表れではなく、子供への関心や注意を示唆するもの、すなわち、あなたを見守る準備ができていることを分かってほしいというメタレベルのメッセージを伝えるシグナル、と見なしている⁽⁵²⁾。それどころか、半ば儀礼化された我々のふるまいの多くが、彼によれば、あなたが言わんとしていることは私はすでに了解済だというメッセージを、より簡略化された形式で示すものに他ならない。とはいえ、ホネットが例として挙げるメッセージは、ベンジャミンと異なり、相反する心情や微細なニュアンス

の揺れを見事なまでに捨象しており、メタ・メッセージではなくメッセージそのものをストレートに伝える形になっている。幼児の微笑みに言及した同じ論考で彼は「パーティの席上の友達には輝く微笑みや強調された歓迎の身振りがふさわしく……」⁽⁵³⁾などと、社会的に類型化された承認形態を列挙するが、私には、事柄を単純化し過ぎているようにも感じられる。笑うべきときには笑うべし、それが彼の主張する、メタレベルにおいて発揮される暗黙の規範であれば、これは全き鏡の論理であろう。「つまり、自分の相手の表現的な行動形式という鏡のように映し出すもののなかで自分が肯定的に留意されているのを見る者だけが、自分自身が基本的な形式で社会的に承認されていることを知るのである。」⁽⁵⁴⁾ そう、たいていの場合は、そうかもしれない。だが他方で、あからさまに無視を決め込んだり、逆にこちらに向かって憤りを隠さず向かってきたりする相手の「真剣な」態度に、隠されたメッセージを読もうとする努力もまた、怠ってはならないのではないか。というのも、そこにこそ、型通りの挨拶よりもはるかに激しい、愛の訴えが控えているかもしれないからだ。だがそうした想定外の訴えは、ホネットがここで、まさに黒人のやむにやまれぬ反抗的態度を例として論じているように、社会的には病理的兆候を示すものとして、無視されてしまう。だが、もっとひどい場合は——彼はこの可能性に全く言及していないが——反抗的態度それ自体が短絡的な認知をこうむり、黒人一般に特徴的なある種の属性、いわば「第二の自然」として実体化されてしまうだろう。

ホネットの熱心な読者であれば周知のように、無視や軽視に敏感に反応する不正意識にこそ新たな承認形式へと人を駆り立てる規範的な潜勢力がある、という洞察を、彼は繰り返し提起してきた。彼がフェミニズム運動を評価していたのは、例えば資本主義的な観点からは二次的な労働行為として軽視されてきた家事や育児を労働史の中に改めて位置づけ直すことにより、そうした歴史を影から支えてきた男性主義的な価値基準を根本から揺さぶる、といった文化闘争の可能性をそこに見出したからだった⁽⁵⁵⁾。

しかし不正意識に関する考察は、ホネットの今までのプロジェクトを概観

する限り、停滞したままだ、と言わざるを得ない。現象としての Miss-achtung、すなわち、既存の制度にうまく組み込まれない承認欲求、注目されないことからくる怒り、マジョリティへの不満、理解されないことへの諦めといった負の感情は、その規範性の無さから放棄されるか、或いは、差異の肯定というお決まりの題目の下で、ただ形式的に承認されるだけである。いずれにせよそこには、他者との差異を尊重しつつ、他者を、その多様性を一切棄損することなく自己と同等の存在と見るべしという、つかず離れずの距離を既に手に入れた物分かりのよい個人の集まりだけが存在する。一言でいうなら、ここでは肝心の闘争プロセスが、やはり見事なまでに捨象されている。

5、相互性なき相互承認——補足的結語

ホネットにとって、差異や多様性の承認は、そうした呼びかけがすでにポストモダンのクリシェとして使い古されているように、改めて問いただす必要もないような自明の要請であるようだ。しかし男性（man）で「ない」（＝人（man）として足りない）という排除や欠如の論理によって男性と差異化される、という来歴を肌身に感じてきたフェミニストには、おそらく、差異はもっと複雑な権力メカニズムを蔵しているのではないか、という警戒があったはずだ。

これまで見てきたように、ホネットの場合、Miss-achtung は基本的には、承認の未充足を意味している。逆にいうなら承認は、それが他者に向かうにせよ、自身に向かうにせよ、文字通り一方的に——欠けている者が、それに気づかない者に対して——要請されるだけである。三つの承認形式に即して表現するなら、もっと自由や平等を、もっと成果を、もっと愛を、というわけだ。無論、それらが不首尾に終わる場合、我々は未充足をもって失敗、と定義することもできよう（だが、気づかない——まさに英語で言うところの miss——者が常に誤っており、欲するものが常に正しいのだろうか）。しか

し上述したように、ベンジャミンはもっと複雑な、それこそ自己と他者との間での相互的な働きかけそれ自体に起因する失敗を論じていた。それは欠如ではなく、まさにフロイトのいう抑圧や否認、或いはその結果として現出する、誤承認とでもいうべき事態である。ハンナがベンジャミンに当初、向けていたいらだちと安心を想起してほしい。無力な傍観者、という（前者が後者に投影した）対象イメージは、クリステヴァ風に定式化するなら、まさに自身の抱える不安や無力感に押しつぶされるのを防ぐために、我が身からアブジェクトされたセルフ・イメージの半身であった。

これは考慮に値する。というのは、自分とは違う（ように現れる）他者がこれほどまでに自分を苛立たせるのはなぜか、という問題に対し、ホネットは十分納得いく説明図式を提供できていないからだ。彼の中には、不十分な承認があっても、承認それ自体が自己欺瞞的に構築されている、といった可能性は存在しない。しかし、例えば白人にとって嫌悪すべき黒人イメージがまさに白人の間でステレオタイプ化して現れるという事態が示すように、自身が消化しきれない——否定しきれない——負の感情が外側に投影され、これを主体が改めて、自分を誘惑する「敵」として承認する、という倒錯した承認プロセスがあるのではないか。

まさにこの「悪しき模倣」の問題に取り組んだのが、アドルノ・ホルクハイマーに代表される批判理論の第一世代だった。なぜ反ユダヤ主義者ほど、彼らの「敵」であるユダヤ人を誇張的に演じてみせることに固執するのかという問題に対し、彼らはフロイト的な投影的同一視の理論でもって説明を試みた。二人によれば、多くのヨーロッパ人が受け入れに失敗したイマージ（要するにそれは、己の欲望に妥協しない、反キリスト教的な享樂者のイマージであり、精神分析的にいうなら、エスである）が投影されたユダヤ人の殺人を通して、禁じられた享樂への道を道徳的に正当化する、という倒錯がそこに起きていた。もっと言うなら、欲望の抑制という「大人」になるための通過儀礼を見事に成功したと確信したまさにその地点において、これを抑制できなかった（とみなされる）「野蛮な」人種の大量殺害を容認することで、

欲望の抑制に失敗し、野蛮そのものへと退行したことが本当の意味で顕わになる、というわけだ。

かくして、差異の承認は容易に、排除への承認ともなる（マジョリティにとって、マイノリティをまさにマイノリティとして認めよ、という要請ほど、たやすいものはない）。主体は、他者の他者性だけでなく、自己に内在する「非同一的なもの」（アドルノ）も承認できない場合、それを、理解しやすいネガティブな表象に軽々に結び付けてしまう。そうして現れる、いわば物象化された「他者」は、実のところ、自己の半身であるがゆえに、嫌悪すると同時に誘惑する対象として、いまだ主体を支配することになる。常にユダヤ人の真似をして楽しむ反ユダヤ主義者はユダヤ人のイマージナリには生きられない、というなれ合いがここには存在する。要するに差別主義者は、自他の区別という否定の仕事をやりきることが出来ていない。周知のようにこれはフロイトが、他者を葬る——この場合、他者を支配できない自分の無力さ、その限界を受け入れることで、他者をまさに他者として、つまり、確かに自分とは違うが、自分と同じように自由に欲望し、自由に想像し、自由にアイデンティティを築くもう一つの主体として承認すること——能力の欠如、と呼んだメランコリーの構図である。

ベンジャミンの *stage combat* は、フロイト的な喪の作業をより実践的に、かつ対象関係論的に遂行するものであろう。それは、政治的にはリアルに *bite* を繰り返してきたもの同士が、ダイアログを通じて、憎しみを *nip* として——消去することなく——包摂することを試みる作業であり、言い換えるならば、互いを単なる敵、手に負えない自身の欲望や不安をぶつけてよい相手とみなす、短絡的で倒錯した承認関係を内側から解体する作業でもある⁽⁵⁶⁾。

不思議なことに、転移や、その克服としての喪の作業について考え続けたフロイト、つまり心の科学における相互主観性の問題に執着し続けたフロイトに、ホネットはほとんど言及しない⁽⁵⁷⁾。彼の承認論の楽観的な見通しは、こうした狭隘なフロイト観にも支えられている、といえは言い過ぎであろう

か。

註

- (1) Jessica Benjamin, *Beyond Doer and Done To. Recognition Theory, Intersubjectivity and the Third*, Routledge, 2018, p.169.
- (2) これについてはM・ジェイ、『弁証法的想像力 フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』（荒川幾男訳、みすず書房、2004〔1975〕年）、特に第3章「精神分析の統合」、第4章「〔研究所〕の最初の権威研究」を参照。
- (3) ホルクハイマーが編集した「社会研究年報」第3巻（1934年）に掲載されたフロムの論文「母権理論の社会心理学的意義」はこれを如実に物語っている。Vgl., Erich Fromm, Die sozialpsychologische Bedeutung der Mutterrechtstheorie, in: *Zeitschrift für Sozialforschung*, Jahrgang3/1934, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1980, S.196-227.
- (4) 例えば以下を参照。「……フロイトはさらに進んで、次のように説明する。すなわち大衆は快楽原則において首尾一貫した一体感を得る、つまり、大衆に身を委ね自己を放棄することで、個人は現実的ないしその代わりとなる満足を獲得するのだ、と。ところでヒトラーが、彼の集会の参加者にとりわけ女性的（female）で受動的な特徴を帰し、それ故また、大衆心理学における無意識的な同性愛の役割をほのめかした時、自己放棄を通じて大衆形成を促すリビドーの源について、彼はよく自覚していたのである。」（Theodor W. Adorno, *Freudian Theory and the Pattern of Fascist Propaganda*, in: Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften*, Bd.8, Suhrkamp, Frankfurt a.M., 2003〔1972〕, S. 413.）アドルノによれば、専ら大衆の感情にヒステリックに訴えるファシストのパーソナリティーは、弱さを外に晒すことなく孤独と不安に耐えながら一家を導く父親的権威とも、そうした権威を体現した古典的な英雄像とも異なる。彼が「偉大な小人（great little man）」と呼ぶファシズムのリーダーとは「彼の仲間と同様に弱く、だが抑制することなくその弱さを敢えて告白することで、結果的には強い男へと変形するような」（Theodor W. Adorno, *Anti-Semitism and Fascist Propaganda*, in: a.a.O., S.398.）男である。いわばそこでは、私もみなさん同様虐げられているのだ、という弱さ——「不幸な」時代に対する被害者意識、とでも別言できようか——の共有を通して、内向きの連帯感が強化されるというわけだ。

- (5) 例えば、フロイトの父親的権威への支持をあからさまに表明している、以下の言述を参照。「医者と患者との間に直接交流（Unmittelbarkeit）が成り立つかのように装うことを潔しとせず、職業的に媒介された（vermittelt）治療の実体をあけすけに語るフロイトの冷たさは、気休めの慰めの言葉や命令ずくの温かさなどより、そうした見かけを容赦なく締め出すことで、かえって人間性の理念に対して敬意を示す結果になっている。」Th. W. アドルノ、「修正された精神分析」（M・ホルクハイマー、Th. W. アドルノ、『ゾチオロギカ フランクフルト学派の社会学論集』、三光長治ほか訳、平凡社、2012 年、所収）、114 頁。
- (6) これについては以下の拙論を参照。入谷秀一、「アドルノの異性愛主義を再考する」、『倫理学年報』第 69 集、日本倫理学会、2020 年、175－189 頁。
- (7) 例えば以下の論考を参照。Jodi Dean, *Discourse in Different Voices*, in: Johanna Meehan (ed.), *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*, Routledge, 1995, pp.205-229.
- (8) 比較的ハーバーマス寄りの規範性重視の立場に立つジョアンナ・ミーハンも「……ハーバーマスは、関係のかつ情動的に構成された自我に社会規範がどの程度依存しているか、その度合いを探究し損なっている」（Johanna Meehan, *Autonomy, Recognition, and Respect: Habermas, Benjamin, and Honneth*, in: Johanna Meehan (ed.), *op.cit.*, p.245.）と述べている。
- (9) アクセル・ホネット、『見えないこと 相互主体性理論の諸段階について』、宮本真也ほか訳、法政大学出版局、2015 年、229 頁参照。ホネットの著作の多くが本邦に紹介されているので、特に翻訳に問題がない限り、本論では訳書に沿って引用、参照する。
- (10) アクセル・ホネット、『承認をめぐる闘争 社会的コンフリクトの道徳的文法』、山本啓・直江清隆訳、法政大学出版局、2003 年、3 頁。
- (11) かみ合わない議論の例としては、ホネットと N・フレイザーの間で交わされた論争（ナンシー・フレイザー／アクセル・ホネット、『再配分か承認か？ 政治・哲学論争』、加藤泰史監訳、法政大学出版局、2012 年）を参照（ここでフレイザーは、極めて攻撃的に、ホネットは耳心地のよい（だけの）形式的な道徳論しか提示していない、と論じている）。

- (12) Iris Marion Young, Recognition of Love's Labor: Considering Axel Honneth's Feminism, in: Bert van den Brink and David Owen (ed.), *Recognition and Power. Axel Honneth and the Tradition of Critical Social Theory*, Cambridge University Press, 2010 [2007], p. 193.
- (13) 第一の故郷は無論、承認をめぐる主と奴の闘争を『精神現象学』で論じたヘーゲルである。
- (14) ホネット、『承認をめぐる闘争』、131 頁。
- (15) ベンジャミンもまた、自らの立場を「批判理論にルーツを持つ関係論的なフェミニスト」(ジェシカ・ベンジャミン、『他者の影 ジェンダーの戦争はなぜ終わらないのか』、北村婦美訳、みすず書房、2018 年、140 頁)と規定している。
- (16) ここでは特に『承認をめぐる闘争』の第 5 章(「間主観的な承認のモデル——愛、法、連帯」)で展開されるウィニコット解釈(131-144 頁)を念頭に置いている。
- (17) この段落でパラフレーズしたウィニコットの主張については、以下を参照。D・W・ウィニコット、『遊ぶことと現実』、橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、2011 [1979] 年、特にその第 6 章「対象の使用と同一視を通して関係すること」。
- (18) アクセル・ホネット、『私たちのなかの私 承認論研究』、日暮雅夫ほか訳、法政大学出版局、2017 年、341 頁。
- (19) ホネット、前掲書、307 頁。
- (20) ホネット、前掲書、341-342 頁。
- (21) 以下、ハーバーマスにおける遊びの概念については、次の文献を参照。ユルゲン・ハーバーマス、『コミュニケーション的行為の理論(中)』、藤沢賢一郎ほか訳、未来社、2006 [1986] 年、特に 227-240 頁、同、『道徳意識とコミュニケーション行為』、三島憲一ほか訳、岩波書店、2009 [2000] 年、特に 222-243 頁。
- (22) ホネット、前掲書、327 頁以下参照。
- (23) ホネット、前掲書、329 頁。原文で *Beteiligten* と表記されている所を当該書では「当事者」と訳しているが、誤訳と判断して、当事者に改めた。
- (24) ホネット、前掲書、307 頁。
- (25) 同上。
- (26) James Martel, A "True-Enough Self": Winnicott, Object Relations Theory, and the Bases of

Identity, in: Amy Allen and Brian O'Conner (ed.), *Transitional Subjects: Critical Theory and Object Relations*, Columbia University Press, 2019, pp.177-178.

- (27) 似たような批判をロビン・モーハンとダニエル・カイルも展開している。二人によれば、前・学問的な生活世界が蔵する道德規範的な潜勢力を見積もり過ぎるホネットは、現実はずでにして理性的である、という悪名高いヘーゲルの視点を、自身の承認論にそのまま持ち込んでいる。Vgl., Robin Mohan und Daniel Keil, Gesellschaftskritik ohne Gegenstand. Axel Honneths Anerkennungstheorie aus materialistischer Perspektive, in: *PROKLA. Zeitschrift für kritische Sozialwissenschaft*, Bd.42, Nr.167, Westfälisches Dampfboot, 2012, S. 260.
- (28) 実際ホネットは『見えないこと』の第一章「見えないこと——「承認」の道德的エピステモロジー」で、カントを引き合いに出しつつ、このように論じている。
- (29) Amy Allen and Brian O'Conner, Introduction, in: Allen and O'Conner (ed.), op.cit., p.5.
- (30) Cf., Joel Whitebook, Wechselseitige Anerkennung und die Arbeit des Negativen, in: Whitebook, *Der gefesselte Odysseus. Studien zur Kritischen Theorie und Psychoanalyse*, Campus, Frankfurt a.M./New York, 2009; Axel Honneth and Joel Whitebook, Fusion or Omnipotence? A Dialogue, in: Allen and O'Conner (ed.), op.cit.; ホネット、『私たちのなかの私』、第13章「前社会的自己の諸相——ジョエル・ホワイトブックへの反論」。
- (31) ベンジャミン、前掲書、164頁。
- (32) これについてはアレサンドロ・フェラーラによる以下の指摘も参照。「ホネットは逆のベクトル、すなわち、母、或いは最初の保護者や自己対象の役割を担う者が、幼児との共生的な絡まりに身を置きつつも、いかにして当の幼児に自律的な主導権の根源を認めることができるようになるか、という問題に全く配慮していない。」(Alessandro Ferrara, Narcissism and Critique. On Kohuts' Self Psychology, in: Allen and O'Conner (ed.), op.cit., p.90.)
- (33) 例えばホネット、前掲書、337頁参照。
- (34) ちなみにホネットが好むこの語をウィニコットは決して使わなかった、とC・フレッド・アルフォードは述べている。Cf., C. Fred Alford, Hate, Aggression, and Recognition. Winnicott, Klein and Honneth, in: Allen and O'Conner (ed.), op.cit., p.57.

- (35) ジェシカ・ベンジャミン、『愛の拘束』、寺沢みずは訳、青土社、1996年、特に37-46頁参照。
- (36) ベンジャミン、前掲書、39頁。
- (37) ベンジャミン、前掲書、40頁。
- (38) ベンジャミン、前掲書、104頁。
- (39) 以下、特に次の箇所を参照した。Benjamin, op.cit., pp.148-162.
- (40) 周知のように、「助けられない/（助けて）」という相矛盾する志向の間で身動きがとれなくなることを、ベイトソンはダブル・バインドの状況と呼んだ。しかし後述するように、ベンジャミンによれば遊びはこの矛盾を（弁証法的に統合するのではなく）^{コンティン}包含しつつ、状況をまるごと違う様相に組み替える働きを持つ。
- (41) Benjamin, op.cit., p. 159.
- (42) Benjamin, op.cit., p. 160.
- (43) Th. W. アドルノ、『ミニマ・モラリア 傷ついた生活裡の省察』、三光長治訳、法政大学出版局、2009 [1979] 年、157-8頁。
- (44) 以下、特に次の箇所を参照した。Benjamin, op.cit., pp.165-169.
- (45) Benjamin, op.cit., p.167.
- (46) 例えばホネット、『承認をめぐる闘争』、176頁以下、同、『正義の他者 実践哲学論集』、加藤泰史ほか訳、法政大学出版局、2005年、93頁以下参照。
- (47) これはウィニコットが報告している臨床例である。ウィニコット、前掲書、61-65頁。
- (48) ベンジャミンはこのようにして、過去の単なる再演（re-enactment）と、差異や変調を生み出す遊び（play）とを区別する。重要なことを付け加えると、彼女は、支配するもの/されるもの、加害者/被害者、といった立場をただ転倒させるだけでは、ナルシズムに支えられたサド・マゾ的構図が繰り返されるだけだ、と考えている。
- (49) ウィニコット、前掲書、53頁。
- (50) Cf., Benjamin, op.cit., p. 150.
- (51) ホネット、『見えないこと』、17頁以下、Honneth and Whitebook, op.cit., p43.
- (52) ホネット、前掲書、22頁以下参照。

- (53) ホネット、前掲書、20 頁。
- (54) ホネット、前掲書、21-22 頁。
- (55) ホネット、『正義の他者』、114 頁、フレイザー / ホネット、前掲書、173 頁以下参照。
- (56) ミーハンはイスラエルとパレスチナの心理学者との間のダイアローグの渡し役を果たそうとする、近年のベンジャミンの政治的プロジェクトについて言及している (Cf., Johanna Meehan, *Intersubjectivity on the Couch: Recognition and Destruction in the Work of Jessica Benjamin*, in: Allen and O'Conner (ed.), *op.cit.*, pp. 200ff.). また、フロイト的な喪の作業が様々な政治的対立が際立つ局面において要請されることについては、いくつかの報告もある (Cf., Noëlle McAfee, *Politics and the Fear of Breakdown*, in: Allen and O'Conner (ed.), *op.cit.*, pp. 209-234; Irena Rosenthal, *Aggression and Play in the Face of Adversity: A Psychoanalytic Reading of Democratic Resilience*, in: *Political Theory*, vol. 44, no. 3, 2016, Sage Publications, pp. 337-362.).
- (57) ホネットは近年、『承認をめぐる闘争』のオブティミスティックなトーンの下では言及さえなかった不安の概念を中心に据えて、フロイトの再評価を——しかもそれは、対象関係論の先駆者としてのフロイトである——行っており (アクセル・ホネット、『理性の病理 批判理論の歴史と現在』、出口剛司ほか訳、法政大学出版局、2019 年、第 7 章「自由の獲得——個人の自己関係というフロイトの構想」参照)、また自らこれを認めている (Cf., *An Interview with Axel Honneth by Inara Luisa Marin*, in: <https://www.journal-psychoanalysis.eu/interview-with-axel-honneth>, 25 Sep. 2020.). ホネットはここで、成人を襲う間欠的な不安は、幼少期に性愛を通して結ばれていた準拠人格との分離がうまくいかなかったことに起因する、という『承認をめぐる闘争』以来の持論を展開する。が、他方で彼はこの不安の残存を、もはや失敗と見なさない。或いは、失敗であってもこれを文字通り、否定的には評価しない。というのは、生物学的でもモナド的でもないフロイトを見据えつつ彼が述べるに、そうした不安の承認にこそ、主体が主体自身に対し自由な関係を構築しうる可能性が賭けられているからだ。とはいえ、このような見直しの作業が近年のホネットの議論にどの程度反映されているか、という点は、慎重に見定める必要がある。

